

Inner Wilderness:
Thoreau and Pastoral Politique in Antebellum America
Yohei YAMAMOTO
山本洋平

本博士論文は、奴隷制度をめぐる南北の思想的対立が激化し、南北戦争へ向かおうとする緊張状態にあった1850年代の北米ニューイングランドにおいて、執筆活動を行ったヘンリー・ディヴィッド・ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)の詩学と政治学に関する研究である。本研究は、エコクリティシズムにおいて再評価され、中核的な視座となっている「ウィルダネス」という概念を軸に論じる。一般的に手つかずの自然と定義されるウィルダネスという用語を、再度19世紀半ばのアメリカにおける歴史的な文脈に据えなおすことで、物理的な空間としてのみならず、内的で多義的な概念空間として捉え直す。

ソローの提示するウィルダネスは、複層性と越境性を特徴としており、その様態を本研究ではパストラル・ポリティークと呼び、ソローの不服従の詩学の思想的な基盤に位置づける。ソローのパストラルの理想は、ウィルダネスの政治学と表裏一体の関係にある。文明の進展にたいする反動として自然空間に向かう登場人物はアメリカ文学では枚挙にいとまがないが、パストラルリズムの浸透は、さらなる反動としてウィルダネスという概念の構築を促すという逆説を生み出すことにもなった。ウィルダネスにたいするアメリカ人の憧憬は、白人の植民者による構築的なイデオロギーに突き動かされ、自然は観念化され風景は虚構化された。このような自然観は先住民の存在をフロンティアから隠蔽し、西部開拓を「明白なる運命」として正当化する白人中心主義的な政治性を強固なものにした。そうした時代的なイデオロギーにたいして、ソローの文学は逆説性を特徴とした文体を駆使することで、ドグマや固定観念から巧みに逃れたという点を本論において強調する。

本研究の目的は、一般的に理解されている楽観主義的なナチュラリストとしてのソロー像を修正することである。その意味で、ウィルダネスという概念もまた、フロンティア精神やアメリカン・ドリームといったアメリカ文化の光の側面に属するばかりではないことは強調しておかねばならない。ピクチャレスクや崇高といったエドモンド・バークの美学概念との関連から解釈すれば、ウィルダネスは元来の意味においても影の側面をもつ。ソローのテキストは、文明のなかにウィルダネスを見出し、東部に臨みながら西部的なるものを感じ、政治性のなかに詩学を織り込むというような、両極に属するものを交差させる詩学と政治学を特徴とするのである。

第1章では、第一作 *A Week on the Concord and Merrimack Rivers* を中心として初期ソロー作品の詩学面における緊張関係を前景化し、その対立軸をどのように乗り越えようとしたのかを論じた。ワーズワスの“*Tables Turned*”の構造と内容が酷似したソローの詩作品を取り上げ、散文作品 *A Week* のなかに自ら引用した経緯について解釈を施した。この韻文作品は、イギリスロマン派からの「影響の不安」(Harold Bloom)のもとで書かれた作品であり、それ自体では「失敗作」であるかもしれないが、その失敗作こそ、後の作品に引き継がれるソローの詩学を生み出すために必要な迂回路であったと結論づけた。ソローの詩は散文に組み入れられ自己言及的に解説が加えられると、韻文と散文とが相補的なダイナミクスを生み出すことで、全体として有機的な作品となると主張した。

英国ロマン主義からの影響に加えて、師匠にあたるエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882)の超越主義もまた、ソローにとっての「影響の不安」であった。言わばダブル・バインドのなかで執筆をしていたソローは「自然は精神の象徴」であるとするエマソンの思想を継承しつつも、ひそかに自然の多様性を回復しようと葛藤していた。英国ロマン主義および超越主義という二方向からの影響に抗おうとする葛藤の痕跡こそ、ソロー文学の特質であると主張する点に本章の独自性がある。生涯、詩人たることを望んだソローは、生存中、二つ散文作品 *A Week* と *Walden* を出版しているが、両著とも自己批評的な長大な詩論としての側面があると結論づけた。

第2章では、ソローがエマソンと英国ロマン主義からの影響に自覚的になり、アメリカ的な詩学を追究する際の成長の軌跡を、自然描写の様式に見だし、その文体の特殊性について詳述する。本章は同時に、博士論文全体の理論的枠組みを提示する役割を担っており、アメリカン・パストラリズムの批評的系譜を整理した上で、ドグマ化しては解体し、常に流転する概念としてウィルダネスという用語を定義し、文学作品を解釈する方法論を提示した。その理論的な枠組みを通じて、*The Maine Woods* の第一話“Ktaadn”を中心に分析し、観念的・言語的世界にとどまる超越主義的な統合的な世界観を脱し、身体性(physicality)や触知性(palpability)を重視する物質的で多様性豊かな詩学を開拓したと結論づけた。

第3章では、これまで論じてきた文学ジャンルの横断的な側面(1章)、および、文明とウィルダネスの侵犯し合う関係性(2章)の議論に基づきながらソローの動物表象に注目し、リアリズムの描写と象徴的な書き方とを往還する手法について論述する。近年、哲学的な観点からも注目される動物論に目配りをしながら、ソローの動物描写が同時代の視覚的、言語的枠組みを乗り越え

ようと試みながらも、南北戦争前夜の政治的なイデオロギーに取り込まれていた様態を議論する。ソローにとって動物を観察し、描写する行為は、先住民をはじめとする人種観を考える触媒としての役割を果たしたと論述した。

博士論文の前半部においては、文学ジャンルと文体を中心にソローの詩学に焦点をあててきたが、後半部においては、ソローの詩学が政治学と往還するダイナミクスこそソロー文学の本質であると主張する。

第4章では、ソローと人種の問題を検討すべく、先住民表象の分析を中心として考察した。*Walden*、*Cape Cod*、*The Maine Woods*において理想化された先住民表象についてはいくつかの先行研究があるが、世俗化され墮落した先住民の表象が各作品に散見される点については批評的に閑却されてきた。そこで本論では、理想化と世俗化の人種表象が並置されている点について、白人による暴力の歴史の正当化と罪の意識の贖いとがせめぎあっていると解釈する。その上で、*Walden*における一見すると周縁化されたかに見える先住民が、作品の全体構造から見た場合、中心的な役割として読みかえられうる解釈の余地をはらんでいると示唆する。

最終章の第5章では、南北戦争前夜に北米を覆っていた国土拡張論と市場社会の問題、そして奴隷制をめぐる問題にたいして、ソローがポストコロニアリズムの観点からも政治的に公正な議論を展開することを可能とした思想的背景について考察する。*Walden*は文明から逃れパストラルな自然を礼賛した書と理解されがちであるが、必ずしも社会問題を閑却していたわけではなく、むしろ、市場が高度化し、分業が制度化したのちの労働市場をめぐる経済(学)の諸問題が中心化された作品である。ウィルダネスの対義語とも見なすことが可能な domesticity に焦点をあて、*Walden*を南北戦争前の労働倫理と分業体制にたいする批判の書として位置づける。結論として、労働にたいする独自の考え方がソローの人種観と奴隷制度をめぐる思想と直接的に関連すると主張した。

博士論文全体の結論として、南北戦争前の時期にアメリカ社会がかかえていた人種・拡張主義・産業化・奴隷制といった諸問題にたいするソローの不服従の政治学は、白人／先住民、東部／西部、労働市場／自給自足といった対立軸を攪乱するための誇張や反復、オクシモロンやパラドックスなど、すぐれて文学的、修辭的、審美的な詩学が下支えしていると強調した。ソローの不服従の政治学は不服従の詩学との相互作用によって成立している。本研究はパストラルリズムとウィルダネスという批評用語における境界侵犯性を特徴として再定位を施し、ソローの不服従の詩学／政治学は、観念や法則としての自然のみな

らず、現存や多様性、曖昧性としての自然に依拠していたと強調する点において、アメリカ文学研究および環境思想研究において独自性を有する。